

1ヶ月で独歩退院した。これまでも脳室内血腫を直視下に除去して良好な結果を得ていたが、今回の例により、第IV脳室、中脳水道の血腫除去により、脳幹症状については予後の改善を企てる事ができると思われ、報告する。

115) 実験的クモ膜下出血モデルにおけるクモ膜下腔灌流の影響

木村 正英・岡部 慎一 (弘前大学)
鈴木 重晴 (脳神経外科)

目的：我々は、クモ膜下出血後の症候性脳血管攣縮発現には血管内腔の狭窄に加えて、末梢脳血管内の多発微小血栓形成が重要であり、更にその遠因として、クモ膜下腔局所性アチドソースが関与することを唱えてきた。今回、実験的に自家動脈血の大槽内注入により作成したクモ膜下出血モデルで、脳室一腰椎クモ膜下腔灌流を生食水およびハルトマン液 (pH 8.0) で行ない、その差異について比較検討した。

結果：(1) クモ膜下出血を作成した成犬の内、生食水の灌流を行った5頭では、灌流翌日には全例で中等度から高度の神経症状悪化を示していたが、ハルトマン液で灌流した5頭では、1頭に軽度の症状悪化をみたのみであった。同時に行った椎骨動脈撮影では、脳底動脈径に両群間で明らかな差異は認めなかった。(2) クモ膜下出血を作成した成猫6匹での、上矢状洞の静脈血のADPによる血小板凝集能は、クモ膜下腔の生食水灌流で上昇し、ハルトマン液灌流で低下する傾向があった。また、生食水灌流群では、高頻度に脳底動脈の血栓を認めた。

116) 破裂脳動脈瘤早期手術における脚間槽ドレナージの遅発性脳虚血症状に対する効果

江塚 勇・小出 章 (新潟労災病院)
小沢 常德・山本 潔 (脳神経外科)

目的。3日以内早期直達術184例中、Grade 1~3, 脳内、脳室内血腫(-), 手術トラブル(-)の諸条件を満たす110例で、脳槽ドレナージ(CD)の遅発性虚血症状(DIS)に対する効果を比較検討した。

対象と方法。第1群：(昭53.1~58.3)47例。脳槽内血腫除去は限局的で28%に脳室ドレナージが行われたがCDは設置されなかった。第2群：(昭58.4~60.9)63例。可及的広範脳槽内血腫除去後Liliequist膜を切開し約90%に脚間槽内CDが設置された。

結果。DISの発生率は第1群40.4%, 第2群31.7%, 破裂脳動脈瘤部位別DISの発生率は第1群40.4%, 第

2群31.7%, 破裂脳動脈瘤部位別DIS発生率は第1群, 第2群それぞれ, MCでは20.0%, 43.3%, AC 41.2%, 31.8% IC 60.6%, 16.7%であった。

考察。CDの結果DIS発生率は約10%低下したが有意な差ではなかった。しかしドレナージ至近距離にあるICのDISは著減し(P<0.05), 遠位部ほどDIS抑止効果はうすれる。この点はCDのDIS抑止効果を強く示唆するものと考えられる。

結論。CDはDIS発生を減少させるが、その挿入部位は破裂脳動脈瘤至近距離に置くべきであろう。

117) 破裂脳動脈瘤超急性期手術における脳槽灌流療法の検討

平 敏・佐藤 昌宏 (福島県立医科大学)
山野辺邦美・浅利 潤 (脳神経外科)
渡辺善一郎・佐々木達也
山尾 展正・児玉南海雄

我々は破裂脳動脈瘤症例に対し超急性期手術を原則とし、脳血管攣縮の出現が危惧される症例に対してはウロキナーゼ、アスコルビン酸を用いた脳槽灌流療法を施行している。1984年5月から1987年2月までの脳槽灌流症例は50例であり、術前のH and K grade I~Vは各々0, 27, 19, 4, 0で退院時のADL 1~5は各々32, 16, 2, 0, 0であった。脳血管攣縮は3例(6.0%)に認められ、神経学的脱落症状を残した症例は1例(2%)であった。脳槽灌流療法の効果及びその問題点について報告する。

118) 脳血管攣縮に対するバルーンカテーテルによる血管形成術

— Percutaneous transluminal angioplasty for vasospastic intracranial vessels due to SAH —

高橋 明・菅原 孝行 (東北大学脳研脳)
蘇 慶展・川上喜代志 (神経外科)
須賀 俊博・吉本 高志
鈴木 二郎

1984年Zubkovらは33例の血管攣縮患者に対して、バルーンカテーテルによる血管拡張術(angioplasty)を行い良好な成績を報告した。最近我々も本法による治療を試みているので報告する。

〔症例〕38才、男性、前交通動脈瘤、小発作、Day IIにneck clipping。術直前に再破裂があり、術後意識は3だったが、最終発作から10日目、術後9日目に意識が30となり、右麻痺が出現した。両側C1からAC, MCのdiffuseなvasospasmに対し、血管撮影用のカテーテルからballoon catheterを導入し、C1から約